

はじめに

さつまいもが鹿児島県で栽培されるようになったのは、17世紀から18世紀初頭で今から約300年前のことである。

この間、さつまいもは襲来する飢饉の救荒作物として、その真価が発揮されたことや、比較的痩せ地でも、また生産条件の不利な地域で栽培しても、そこそこの収穫が得られたこともあって、沖縄、九州から全国に伝播し、栽培面積は増大していった。

しかしながら、民の食生活においては、主役は水稻や麦類などの穀類で、さつまいもは脇役であった。これが、さつまいもの生産とでん粉製造が一体的に結びつき、産業として認められ、発展したのは昭和の世になってからのことである。

鹿児島県におけるさつまいもの栽培は、でん粉産業の発展と連動し急激に作付面積は増え、昭和38年度には史上最高の面積、7万1500haに達した。当時の鹿児島県の普通畑面積の6割、総農家戸数の9割の農家がさつまいもを作付けしていた。当時、大きな産業が立地していない中であって、さつまいもの生産とでん粉製造業の立地は、まさに地域の農業と産業の中核をなすものであった。

その後、国際化の進展や、農業者の高齢化、担い手不足は、さつまいもの生産とでん粉産業に多大な影響をもたらし、さらには国内農業の構造改革が進み、より収益性の高い農業への転換が求められるようになった。昭和40年代になると、さつまいもの作付面積は急速に減少し、昭和60年はピーク時の31%に、平成に入って2万haを割込み、現在1万4000haとなっている。

こうした状況の中、鹿児島県では「でん粉原料用」「焼酎原料用」「青果・加工原料用」など、需要に応じた計画的な生産を進めることとし、関係機関、団体、企業が一堂に会する「鹿児島県さつまいも・でん粉対策協議会」を平成16年に立ち上げ、さつまいもの生産・でん粉製造、焼酎原料向け、など具体的な活動方針に基づく展開を図ることとした。

特に「でん粉原料用さつまいも」については、でん粉工場の操業能力に見合う原料の確保とでん粉の品質向上を基本として、でん粉専用品種の育成、でん粉の加工技術とコスト低減、でん粉の食品向けの促進を図るため、これまで「でん粉工場の再編対策」「排水処理対策の促進」「同時乾燥や、加工食品向けに対応できる処理システムの構築」など積極的な取り組みも見られるようになった。

これらの歴史的な変遷を取りまとめ、その結果を関係者に広く情報として提供することは、今後のさつまいもを考える上で重要な課題と考え、とりまとめの作業を進めてきた。

内容については、永い歴史、また膨大な資料の中から、部分的なまとめになったかもしれないが、これからのさつまいもの生産とでん粉製造技術の改善、産業の発展の一助としていただければ幸甚である。

なお、執筆に当たっては、各々の分野の専門家をお願いをしたところ賛同をいただき、ご多忙中にもかかわらず執筆を引き受けていただいたことに心より感謝申し上げます。

(元鹿児島県農政部 下野公正)